

地区名	岡崎	学校名	岡崎市立福岡小学校	執筆者	杉本智恵
テーマ 単元名	身近な環境に主体的に関わり、よりよい環境について考え、行動できる子供の育成 ～3年「セキレイのすむ町 すてきな生平」の実践を通して～				

1 主題設定の理由

本校は、全校で愛鳥活動に取り組んでいる。そのため、本学級の子供たちも野鳥愛や野鳥を守りたいという意識はとても高い。しかし、野鳥と自然環境との関係や人間の生活との関わりなど、背景にある要因や環境変化などにあまり考えが及んでいない現状があった。SDGs が叫ばれ、学校教育においても、持続可能な自然環境の形成や社会づくりについて考え、行動できる子供の育成が求められている。本学級においても、単なる野鳥調査や野鳥保護で終わるのではなく、愛鳥活動を窓口にして、野鳥調査から自然環境や人間の生活との関わりを見つめ、持続可能な自然環境を目指して、よりよい自然保護や環境保全のあり方について考え、行動していく総合的な学習（本校では「ふるさと学習」と呼んでいる。以下ふるさと学習）を創っていきたいと考えた。

セキレイを題材にして、3種類のセキレイの分布調査から身近な自然環境を見つめ、よりよい自然環境のあり方について考えを深め、自分たちができる環境保全に取り組んでいくことができる子供を育てていききたいと考えた。

2 研究の仮説と手立て

(1) 目指す子供像

- ・身近な自然環境について関心をもち、課題を見つけることができる子供
- ・自ら進んで追究し、よりよい自然環境のあり方について深く考えることができる子供
- ・地域の自然環境の現在や未来に思いをよせ、環境保全を目指して取り組んでいくことができる子供

(2) 仮説と手立て

<仮説1> ふるさと学習の単元の始まりに、愛鳥活動を窓口にした体験活動の位置づけや地域の人と共に取り組む野鳥の分布調査を行えば、身近な自然環境について関心をもち、課題を見つけることができるだろう。

【手立て1】 愛鳥活動を窓口にした体験活動の位置づけ

- ・校内でのセキレイ観察とセキレイ分布調査を行う。

【手立て2】 地域の人と共に行う野鳥の分布調査

- ・学区の老人会や全校児童に協力をお願いし、学区全体の3種類のセキレイ分布調査を行う。一月ごとの生息分布の状況を調べる。
- ・分布図から分かることを話し合い、各セキレイの生息状況と特徴について考察する。

<仮説2> ふるさと学習の追究過程で、専門家講師への聞き取りの場の位置づけやタブレット端末（iPad）を活用した意見交流の工夫を行えば、自ら進んで追究し、よりよい自然環境のあり方について深く考えることができるだろう。

【手立て3】 専門家の講師への聞き取りの場の位置づけ

- ・個別追究で生まれた疑問や、調べたことに関することについて聞き取りを行う。

【手立て4】 タブレット端末（iPad）を活用した意見交流の工夫

- ・調べ学習で得た情報をタブレット端末（iPad）の授業支援クラウド（スクールタクト）で共有し、いつでも確認できるようにする。

<仮説3> ふるさと学習の単元の終わりに、社会的発信活動の場や1年間の振り返りの場の設定をすれば、地域の自然環境の現在や未来に思いをよせ、環境保全を目指して取り組ん

でいくことができるだろう。

【手立て5】社会的発信活動の場の設定

- ・ 追究過程で交流した市役所環境政策課の職員の方に制作したセキレイ新聞を持って行き、セキレイを守るための自分たちの考えを提言する。

【手立て6】1年間の追究活動の振り返りの場の設定

- ・ 1年間を通して行った追究活動を振り返り、今後の取り組みについての考えをまとめる。

3 研究計画

(1) 「ふるさと学習」3年生で身に付けさせたい資質・能力

資質・能力	環境に対する感受性	環境に対する見方・考え方		環境に働きかける実践力
	学びに向かう力	思考力・判断力・表現力	知識・技能	人間性・生き方
3年生 生物多様性・共存共生	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身体活動を伴った体験活動を通して、自らの諸感覚を活用して地域で見られる野鳥や自然事象について感じ取ることができる。 ・ 地域の自然環境に興味・関心をもち、意欲的に観察したり、調査したりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の自然環境に関して課題を見つけ、課題解決のために観察・調査を工夫して情報を収集したり、資料を効果的に活用して自分の考えをまとめたりすることができる。 ・ 地域の自然環境の現状や推移、変化を捉え、その推移や変化の原因を考察することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の自然環境の生物多様性や共存共生についてその特色や変化について捉え、そのよさや問題点を理解することができる。 ・ 観察や調査したことをまとめてデータ化したり、自分の言葉で説明したり、リーフレットや新聞に整理して発表したりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の自然環境のよさや問題点を理解し、その環境を守るために、友達と協力して調べたことを発信することができる。 ・ 自分たちの生活が自然と深い関わりの上に成り立っていることに気付き、自分の生活を見直し、自分たちができることに取り組むことができる。

(2) 題材「3種のセキレイ」の価値

生平学区は、平地のハクセキレイ、丘陵地のセグロセキレイ、山地のキセキレイの3種が生息する市内でも珍しい地域である。ハクセキレイは市の鳥であり都市適応種である。セグロセキレイやキセキレイは都市忌避種であり個体数が減少している。この3種のセキレイを題材とすることで、生態の違いや生息数の変化などから自然環境の変化を捉え、環境保全の思いを高め、行動できるようにしていきたいと考えた。

(3) 単元計画

<p>「セキレイのすむ町 すてきな生平」(47時間完了)総合35 理科2 社会3 国語5 算数1 道徳1</p> <p>○学区のどんな場所にどんなセキレイがいるのか調べよう(12時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ セキレイの違いを調べ学校のセキレイマップを作成する ①～④ 【手立て1】 ・ 老人会の方や全校児童に協力を依頼し、調査する ⑤～⑩、随時 【手立て2】 ・ 調査から分かったことをまとめ、振り返りを行う ⑪、⑫ <p>○どうして市の鳥が「ハクセキレイ」なのだろう(19時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分のテーマを決めて岡崎市とハクセキレイの関係を調べる ⑬～⑲ 【手立て4】 (もっと知りたいことを専門家の方に聞く ⑲、⑳) 【手立て3】 ・ 分かったことから考えをまとめ、発表する ⑳～㉓ <p>○セキレイを守れるように多くの人に伝えよう(16時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「ふるさと学習まとめ発表会」で地域の方に伝える ㉔～㉗ ・ 市役所の環境政策課に提言に行く ㉘～㉚ 【手立て5】 ・ 一年の活動を振り返る ㉛、㉜ 【手立て6】
--

(4) 検証の方法について

抽出児童A、Bの変容を追跡し手立ての有効性を検証する。抽出児Aは、野鳥を見つける場所が身近な行動範囲内にある。経験から考え自発的に調べようとしなない。また学区の人との関わりは受け身的である。抽出児Bは、個別学習を根気強く続けることが苦手で、追究を途中で諦めてしまう。また分かったことを友達に表現できずに終わってしまう。本単元を通して、児童Aは視野や興味の幅を広げて追究を続け、進んで環境保全に取り組んでいく姿を、児童Bは見つけた課題を根気強く追究し、考えたことを自信をもって発信していく姿を期待する。

4 実践

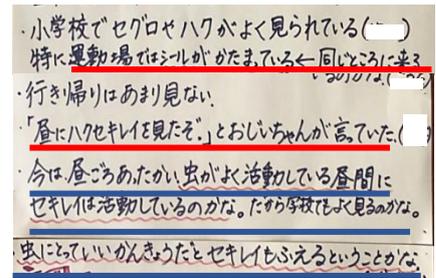
(1) 愛鳥活動を窓口にした体験活動の位置づけ（手だて1について）

本校の児童は1年生の頃から野鳥を探し、ウォッチングカードにかいているため、3種類のセキレイについて見分けがつく。しかし、セキレイについて知っていることを尋ねると、体の色や大きさは答えたが、どこにいるのか、どんなことをしているのかなど、詳しいことは知らなかった。そこで校内でのセキレイ調査を実施し、セキレイがどの場所にいるのか調べることにした。



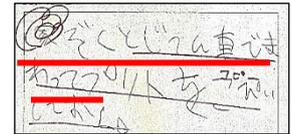
【資料1】校内のセキレイマップ(4/15~4/28実施)

セキレイを見つけたら、校内の地図にハクセキレイは緑、セグロセキレイは青、キセキレイは黄色のシールを貼るようにした(資料1)。児童Bは資料2の赤線部分のように、運動場のシールが集まっていることに着目し、何日にも渡り、じっくりと観察することで、同じ場所に繰り返し飛来してくる事実を掴んだ。また、児童Bは家族の気づきを学級で伝えており、家族でも話題にするほど興味をもっていることが分かる。そして、その発言から、児童Aは青線部分のように学校でよく見たとい



【資料2】「マップから気づいたこと」の板書(5/2)

う事実を餌になる虫と関係づけて考えることができている。さらに児童Bは話し合い後の振り返り(資料3)で「かぞくとじてん車でまわってプリントをこぴいしておく」と書いており、学区地図をコピーしたものを用意して家族と地域の調査も自主的に始めようとしていることが分かる。



【資料3】児童Bの振り返り(5/2)

単元の始まりに、自分たちでできる学校内のセキレイ分布調査を行ったことで、セキレイをじっくり観察したり、野鳥と餌である虫との関係に気付くようになっていたりして、身近な自然環境に目が向き始めた。また、家族の協力で、さらに意欲的になり、学校外の野鳥調査へのやる気も高めることができた。

(2) 地域の人と共に行う野鳥の分布調査（手立て2について）

資料3の児童Bのように、地域に生息するセキレイに目が向くようになり、学区セキレイ調査を早く行いたいとの声が上がってきた。そこで、学区の生息分布状況を調べることにした。しかし、本学級の児童は7名であり、広い学区には、児童が住んでいない地域もある。さらに、資料2のように子供たちは昼間の調査が大事だと考えていた。そこで、全校児童だけでなく老人会の方に調査の協力をお願いし、学区の正確な分布状況が分かるようにした。

全校児童への協力依頼は、全校行事「ふるさと学習テーマ発表会」で行った。「3年生が住んでいない、築野と古部の人は積極的に貼ってください。」と協力を依頼した。また学区の老人会の方たちを学校に招き、調査を依頼した。

6~8月の得られた調査結果を、種類ごとの分布図にして全員で見比べた(資料4)。児童Aは



【資料4】3種類のセキレイの分布の違い

多くの人と「一緒にやれることがある」(C17)と行動していく決意を見せ、「大人になってもここにいる」(C19)という学区の未来に思いを馳せている。最後の振り返りでも、児童Aは資料27のように「『しぜん』という言葉が心にのこった」ふるさと学習を「まだまだしらべたいことがいっぱいあるから」続けたい、「わくわくどきどきです」と自然を大切にする学習を今後も継続していく意欲を示した。

単元の終わりに、1年間の振り返りの場を設定することで、1年間の自分の成長を振り返り、自然豊かな学区にいる将来の自分を思い描き、これからも学級の仲間や多くの人と協力して、地域の自然を守っていく取組をしたいと、考えをまとめることができた。

5 仮説の検証

仮説1については、手立て1の学習の始めに自分たちで学校内のセキレイ分布調査を行うことで、児童Bが継続観察を行い、児童Aが野鳥と虫との関係に気付いたように、身近な自然環境に目が向き始めた。そして児童Bが家族と自転車地域調査を始めたように、学校外の野鳥調査へのやる気も高まった。手立て2の老人会や全校児童と分布調査を行うことで、3種類のセキレイの生息域の違いが明確化された。児童Aは「人がいるところがいい鳥と自然がいい鳥がいる」と新たな考えをもち、児童Bは「ほかのまちとかでもどこでみられるのか」と新たな探究へ思いが高まった。よって手立て1や手立て2は、身近な自然環境について関心をもち、課題を見付けることができる子供の育成に有効であった。

仮説2については、手立て3の学習の追究過程での、専門家講師への聞き取りから、児童Aは自然環境の変化と野鳥の環境適応との関係を理解し、学区の自然環境を知るための調査や分析へと追究を深め、自然環境を守るための自分の考えをもつようになった。手立て4のタブレット端末の授業支援クラウドを使って情報を共有することで、児童Bは友達の学びを活用して野鳥の知名度や人気度について自分の考えを深め、野鳥保護への思いを膨らめていくことができた。よって、手立て3や手立て4は、自ら進んで追究し、よりよい自然環境のあり方について深く考えることができる子供の育成に有効であった。

仮説3については、手立て5のふるさと学習の単元の終わりに、市役所職員への提言という社会的発信活動の場を設定したことで、児童Aは「市の鳥を3種のセキレイすべてにしてほしい」と、児童Bはポスターとセキレイ新聞を「多くの人が見てくれるところに掲示してほしい」と市役所職員に伝えた。そして、児童Aは市のホームページ掲載という新たな広がり感動し、発信からの環境保全を実感した。児童Bは市役所職員の生物多様性の話を聞き、野鳥保護から野生生物保護へと視野を広げた。岡崎市民がセキレイを知って、セキレイや自然を大切にしてほしいという、岡崎市の未来に思いをよせて、環境保全のための発信を、充実感をもたせながら行動化することができた。手立て6の1年間の振り返りの場を設定することで、児童Aは生態調査から環境保全へと考えが広がった自分の成長を、児童Bは課題解決に向けて追究を続け、思いを行動化できた自分の成長を振り返った。そして、児童Bのように自然豊かな学区にいる将来の自分たちを思い描き、これからも仲間や多くの人と協力して、地域の自然を守っていく取組をしていきたいと、考えをまとめることができた。よって、手立て5や手立て6は、地域の自然環境の現在や未来に思いをよせ、自分たちができる環境保全に取り組んでいく子供の育成に効果的であった。

6 今後の課題

本研究では、個の追究が深まるにつれ、新たな課題を子供たち自身で見出し追究を続ける姿があった。学習に没頭していく様子をうれしく思う反面、区切りの付け方や時間配分が難しかった。各教科と連携した綿密なカリキュラムマネジメントを行うことで、子供たちがより主体的に追究し行動していけるように改善を図りたい。